

▼研究旅行▲

実った友情交歓

二年 小田島 和子

大学というところは、高校などと違って自由で強制されないかわりに、自分の方からくつついていかないと、どんどん置いてきぼりにされてしまう。後で考えて、学校とのつながりが授業だけしかなかったというのもさびしい。それに友だちと相談して、皆で旅行するのも最初で最後かもしれない。「行こう行こう」ということになったのである。参加人員が少ないのも何となく量よりも質を思いおこさせた。しかし、申し込みをしてから実施まで時間が経過しすぎて、拍子ぬけた感じであった。

東京はいつになくビルの谷間にまで鮮やかな光が射しこんでいたのに、京都はどんよりした曇り空。その天候も、高雄へ向けてバスを進めようとする頃には嵐のような降りになっていた。これから私達の行こうとしているところは山の中とか。雨に降りこめられてしまうのではないかしら……。が、段々小降りになった。旅行先での雨ほどいやなものはない。せつかくの観光

地がその魅力を押しかくしてしまうことが多いからである。しかし、京都に限っては、この常識をうち破ってくれた。多すぎるほどの緑が水分を含んで、いっそう鮮やかさを増している。石段はしっとり濡れて、息を切らして登る私達に古(いにしえ)を語りかけてくれるようである。神護寺に登った。本堂は朱を押ししたようなげげげしい感じである。私達の今回の旅行は、文学の舞台を探索することが目的なのである。しかし、全体を通じて感じたことだが、昔の面影を語るものはもうあまりなくなったと思えてならなかった。それらは各々の文学作品の中で、また、それを読む人の中で昔の姿が広がっていくばかり、というのが本当なのではないだろうか。私がそう感じるのは、これらの舞台になっている作品を、あまり読んでないからかもしれない。折しも、京都はシーズンオフ。悪天候で観光客はチラホラ程度。高尾などは私達一行くらいである。文学探索にはもってこいの条件がそろっているはずなのに……。

京都駅に近い旅館、ここを基点に私達は行動を開始したのである。思ったより居ごこちのよい旅館だ。食事もいい。クラーのきいた部屋で、この旅行の目的の一つである友情交歓に花をさかせたのである。

翌日、三つのコースの中から飛鳥を選んだ。八時半には旅館を出発、近鉄特急で快適な旅を味わった。京都の曇り空と比べて、飛鳥は夏の日射しが強い。鬼の俎、天武、持統陵、橘寺、石舞台、岡寺、飛鳥寺等を見て歩いたが、強健な足向きのコースであった。しかし、弱音を吐く者は誰一人いないし、歩いた後、サッパリ気持がよかった。飛鳥は京都のような華やかさはまったくない。かつて都が開かれ、政治文化の中心となっていたという影は見あたらないのである。あくまでも穏やかな、田園風景の似合うところであった。岡寺の急な坂の途中にあった茶店のおそば、安くておいしかった。そして、そこのおぼさんの感じのよさ、一番記憶に残っている飛鳥のイメージである。

三日目、朝からドシャ降りである。昨夜の疲れに乗じて、いっそう出かけたくない。思い切って雨の中へ出ると、もう勇ましい気分になっている。今日は嵯峨野コースを取ってみた。最初に訪れた清涼寺は一般に公開していないそうだが、先生の交渉の末、拝観を許された。京都と言え、やはりお寺めぐりになってしまいが、信仰心の薄い私には全部同じに見える。化野(あだしの)念仏寺は一風変わっているので少し興味がわ

いたが、あとは何と言ってよいかわからない。雰囲気で見ることにした。昨夜から激しい雨にたたられた嵯峨野も午後頃には日が射すくらいにまでなった。雨に洗われて鮮やかさが増した山が美しい。見上げると、すぐ近くの山に紅葉を思わせる木々が所々にあって、秋の盛りはさぞかしだろうと思わせた。

京都は二回目である。一回目は、一日、バスでほんの主なところを回っただけであった。こんな旅行も大学生らしくていい。しかし、ちょっと反省しているのは、予備知識のなかったことである。どこへ行っても、自分の見ようとする目的が何であるかわからなかったらどうしようもない。ちょうど私がそれなのである。終始ポケットとしていたことだろう。「ここではこの点を注意して見る」くらいの勉強は必要であった。旅行のしおり「文学散歩」を、もっと前に渡してほしいとも思った。

私達のもう一つの目的である友情交歓は、どうやら達せられたようである。その上、今まであまり話したことのない人達、先生ともお話ができたことも、この旅行の収穫であった。